

# はじめに

拙書「皮膚外用薬の使いどころ・使わずどころ ～皮膚科医が伝えたい、外用療法の診療プロセス～」をお手にとっていただき、ありがとうございます。

本書のはじまりは、2024年7月、羊土社とのweb面談でした。「皮膚科受診前に外用治療されてしまうと困ることがありますね」という私の一言から話が広がり、初期研修医や他科の医師向けに外用薬の使い方をまとめた本を作りたいという話になりました。てっきり編集のお手伝い程度だろうと気楽に聞いていたところ、私の単著だと言うではありませんか。思わず言葉を失いました。これまで依頼された原稿は断らずに書いてきたとはいえ、丸々一冊を自分で書くことなど、想像もしていませんでした。それでも、こんな機会は二度とないかもしれない、皮膚科医として光栄なことでもあると思い直し、お受けすることにしました。

そこから出版まで約2年がかかりました。生成AIで何でも簡単に調べられる時代に必要とされる教科書とはどのようなものなのかと悩みました。出した答えは、「AIが学習できない私の心の中を存分に詰め込んで書いてしまうこと」でした。もちろん正確な情報も不可欠ですので、引用文献もきちんと提示してあります。臨床の現場でさまざまな皮疹を前にしたとき、すぐに皮膚科へコンサルトできないなか「とりあえずどうすればよいか」という疑問に、できるだけ答えられるように執筆したつもりです。

本書と他の外用療法の本との違いは、外用薬の「使いどころ」だけでなく「使わずどころ」、すなわち皮膚科医として避けてほしいこと・気をつけてほしいことにも踏み込んでいる点です。外用薬の使い分けはもちろんのこと、外用療法の考え方とそのプロセスを理解していただければ、読んでいただいた方の診療はきっと変わると思っています。

本書の執筆にあたっては、多くの方のお力を借りました。初期研修医が実際にどのような疑問を抱えているのかについて、当科をローテートしていた石井徹先生、深津里佳先生、小林咲慧先生、星野日花里先生から貴重な助言をいただきました。

また、金沢医科大学皮膚科 清水晶先生・竹田公信先生，琉球大学皮膚科 山口さやか先生，公立七日市病院 工藤亜希子様，同門の服部友保先生・新見佳保里先生にもご協力いただきました。いずれの方々にも，この場を借りて深謝いたします。そして，内容に沿った素敵なイラストを描いていただいた早瀬あやき様，企画の立ち上げから校正・出版まで一貫してサポートしてくださった羊土社の伊藤様，中田様，清水様に心より御礼申し上げます。

本書を手にとってくださった先生方の日常診療に，少しでも役立てていただければ，これ以上の喜びはありません。

2026年5月

群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学 准教授  
安田正人